



動物レスキュー通信

2014年4月 第11号 (平成26年4月1日発行)

発行元

一般財団法人 国連世界動物救済支援機構 詩月財団

詩月(しづく)：詩月財団 理事長
愛玩動物飼養管理士 一級
お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

4月、いよいよ新年度の始まりですね。新入学や新入社など初めての事にトライする方も多いかと思います。そこでこの動物レスキュー通信でも新しい試みを始めて頂みようと思います。いつもは理事長の詩月が代表して思いや情報をなどを書かせて頂いていますが、今回は詩月財団メンバーで会長秘書の眞崎準(MAZAKU)に皆さん伝えたい思いを文章にしてもらう事にしました。彼は普段から毛皮の存在に付いて異を唱えています。毛皮の事を勉強し、毛皮を貢わないようにと呼びかけています。まずは簡単に毛皮の事について書いておきます。毛皮とは文字通り、体毛が付いたままの獣皮の事です。人間が毛皮を身に付けるようになったきっかけは、それまで裸自然の姿で暮らしていた祖先が寒さをしのぐため、食用に狩った動物の毛皮を身にまとつた事が始まりだと言われています。そして日本で毛皮がファッショントとして認知されるようになったのは美智子さまが皇太子との成婚の際に着用されていました。しかし毛皮がきっかけだとされています。しかしある分かりのように、日本の気候風土では毛皮は必要ありませんので、この頃は今のように誰でも手にするものではなくステータスシンボルとしての意識が高かったようです。そして今では、安価な洋服などでさえも毛皮が付いている物がたくさん流通しています。以下、MAZAKUの思いが綴られています。

毛皮に関する現状と私たちが伝えたい事

毛皮のことについて

毛皮の為に犠牲になる動物は犬、猫、きつね、タヌキ、アライグマ、うさぎなど、なんと年間10億頭にも上ります。これらの毛皮はロシア、フィンランド、カナダ、中国、アメリカ、香港、テネマード、イタリア、フィリピン、フィンランド、ポーランドなど、実際に様々な国から日本にやってきます。その中でも中国からは毛皮そのものとしてではなくすでに衣類などに製品化され輸入されているのが現状です。毛皮は高級品であると言う認知が広がり人々は求め、毛皮はコート以外にもコートの襟やバッヂマフラー、キー・ホルダー、小物にまでも使われるようになり、どんなに小さくても、少なくとも動物の犠牲は増えつつあるのです！

犬や猫を使用した毛皮

アジアでは、ノラ犬やノラ猫が捕まえられて飼育され、そして殺され毛皮を剥がれます。生きたまま剥がされる場合もあります。そしてその多くは染められてしまふねやミンクの毛皮として出荷されるのです。1枚のコートを作る場合、犬なら13匹程、猫に至っては25匹程が必要です。当然の事、子猫もしくは子犬の場合もつと多く必要です。これらの毛皮、犬の毛皮のタグには、オオカミソバキ、アジヤックカル、グーピー、アジアオオカミ、エキゾチック毛皮と記載され、猫の毛皮のタグには、家猫(Housecat)、野生猫、katze Telie(猫皮のドイツ語)、ウサギ、ゴヤン、山猫と記載され、偽られて売られているのが現状です。年間およそ100万頭から80万頭分が日本のために殺されているといつじが明らかになりました。これは酷い状態でしょう。日本には毛皮のために殺される動物に関して規制がありません。

産業動物として考えられているリアル毛皮えます。現在の日本でも毛皮反対の運動はだんだんと大きくなっています。動物養殖業者が居なくなる状況とするべきであります。日本で販売されているリアル毛皮製品のはほとんどは輸入品です、リアル毛皮をなくすことには輸入量を減らすことが必要だと思います。ます力を入れるべきだと思います。このままリアル毛皮を無くすべく大きな運動にすることが課題です。消費者にはそのまま啓発を続けていく必要があります。ます力を入れるべきなのは、メーカー、ブランド、店舗に対する啓発です。消費者運動と考えられます。最近は動物を犠牲にしない「エイクファー」も登場しています。毛皮は動物達の物です。もうリアル毛皮を買わない。エコファーナーを選ぶ。といふ選択をみなさんにして頂きたく思います。毛皮は動物達が寒さから自ら守るためにある物です。リアル毛皮全廃に是非ご協力ください。この現状をたくさんの方に伝え、一人でも多くの人の毛皮に対する意識を変えていきましょう！最後までお読みいただき誠にありがとうございました。(MAZAKU)

